

七「チヨツと姫路へ遣る手紙を書いています」番頭「明日出す手紙なら明日書いたら良え、早ふ寝なはれ
 「藤七」けども餘り宵から寝るのは勿體なうおます」番頭「何や勿體ない。妙な事云ふな。何時も燈りが
 點いたら居眠てるや無いか。寝られんのなら恰度好えワ、安治川え荷出しに往きなはれ」藤七「滅相な
 事。寝まして戴きます」番頭「夫れ見くされ、皆寝えや。モウ寝たか……寝たら駈かきや」皆「ア駈の催
 促や……グウ……グウ……」番頭「何や、云ふたら急に駈かき出しよつた、……コレ本眞に寝てるの
 んかいナ……狸と違ふか……コレ」○「グー」番頭「コレ」○「グー」番頭「コレ」○「グー」番頭「ア
 駈で返事してよる。悪い奴やで皆……實際寝てるのんかいナ……久久とん……」久七「グウ」番頭「久
 七とん……」久七「グウ……」番頭「何うやら寝よつたらしい……此間に一寸便所へ……ア、ニコ、ハ
 笑ふて駈かいてやがる。仕様の無い奴や何奴も這奴も……ナア其處へ往くと子供は邪が無い哩、番
 頭はん別嬪連れて來たさかい十錢お呉なはれ。八釜敷い云ふて十錢取りよつたが。枕元へ放つとい
 て寝てよる。今の内に取り戻しといたる」丁稚「グウ……」(駈をかき乍ら頭を上げて搜す)「番頭」コラ眼
 を聞いて駈かく奴が有るかい」丁稚「誰方も夜ざとうお寝み、豪い物騒な晩でおますせ」番頭「何を云ひ
 腐る。早ふ寝んかい。サア寝よサア寝よ」△「貴方が八釜しいて寝られしまへんねがナ」番頭「私が寝ん
 と何奴も寝やがらん、サア寝てこます」番頭も根負けして其儘寝て仕舞ひました、他の者も饒舌り草
 疲れて皆夫れ〴〵寝て仕舞ひましたが、暫らくしてフト眼を醒したのが奎平、奎平「グウ……グウ……」

邊りをキヨロ〴〵見廻し乍ら)グウ……久七とん(小聲)……久七とん「久七」何だす」奎平「ア、貴方
 起きてるのんかいナ。番州遂々寝よりましたで」久七「往生して諦めよつたんだすな」奎平「モシ今日來
 た女婢は途方も無い別嬪だすナ」久七「別嬪だす」奎平「横町の張籠屋の女婢と、何方が良えと思ひなは
 る」久七「阿呆らしい、競べ物に成りますかいナ」奎平「そやけど張籠屋も悪ふはおまへんで」久七「貴方
 二言目には張籠屋〴〵云ひなはるけど、あら塗つてまつせ。粉の噴いたんが好きやつたら冬瓜見とき
 なはれ」奎平「そない豪ら相に云わいでも宜ろしいがナ」久七「貴方が解らん過ぎるさかいや。此方は生
 地なりだつせ。そんな貴方。誤魔化し物と一口に……」奎平「別に左様、青筋立て、怒らいでも宜え
 や有まへんか、唯鳥渡訊ねて見た丈けだすがな」久七「別に怒らしまへんけどナ。……今日日暮に私が
 三番藏から出て來ると、漬物納屋の中で何やらゴト〴〵音がしまんね。何やいな思ふて覗いて見ると
 今日來た女婢が漬物の重石持つて難儀してるやおまへんか、何をして居なはるのや云ふたらナ、女と
 云ふ者はあかん者どするなア、餘り石が大かいので、揚がらんのだすえ……と斯様に云ふさかい、退
 きなはれ揚げたげまよ云ふて、私が除けて遣たらナ、オ、ウ、ウ、ウに憚りさんどす。何うだす奎平どん、
 京の女は禮を云ふのに吃度言葉を押え附けまつせ、オ、ウ、ウ、ウに憚りさんと云ひよる依て、私もイン
 エ滅相なと」奎平「しよむ無い事云ひなはつたんやナ」久七「あの、卒爾でムりますが、お名前は何と仰
 有ります、こないに云ひよる依つて、へエ私は當家の三番々頭にて久七と申します。以後お見知り